

## 新しい道をつくる

2017～2018年

2017年度は参加者が30人近くいたので、土浮庵づくり班と道普請班に分け、土浮庵再建と並行して、音楽棟裏から土浮庵への道をつくる作業を始めた。

土浮庵もそうだが、草木生い茂る丘の斜面に道をつくることは、つちのいへの原点である土地開拓に近い。

道をつくること、それは人と風景の新しい関係をつくることであり、新しい光と風を通すことで知覚と行動の新しい地平を開き、日常世界を刷新する。道をつくることと芸術制作は無関係に思えるが、人の経験に対する働きかけは深いところにつながっている。つくる人と見る人を新しい知覚世界に誘おうとする芸術は、新しい「道」をつくる作業とも言えないか。



2017年5月11日、土浮庵再建と同時に作業開始。



土浮庵再建現場から右斜めに降りる道を開く。



傾斜が急なところには階段を設ける。



視野を遮る草を刈ると、音楽棟から西山への眺望が開ける。道をつくることは新しい風景をつくること。



改良前の階段。横に溝がなく、これでは上を水が流れてすぐに壊れる。



階段をしっかり作るため、杭と蹴込み板をつくる。



改良後の階段。溝も掘り、杭をしっかり打って蹴込み板を固定した。



溝を掘る。道づくりの基本となる文字通り「地道」な作業。屋外の造形でもっとも重要なのは水の処理。水は、家であれ、道であれ、階段であれ、いつかすべてを破壊し尽くす。溝のない道はすぐに壊れる。溝自身もいつか崩れるので、メンテナンスが必要になる。



試しに水を流す。一筋の水の流れに歓声上がる。コンクリートの側溝は、沓掛キャンパス造成時に、丘の地形維持のためにつくられたと思われる。



2017/6/8

草ぼうぼうの斜面に道を切り開く土木作業。



道をS字に雁行させる。再建中の土浮庵が見える



2017/6/29

ここでも溝を掘りながら、階段をつくる。



2017/7/6

大きくカーブする部分の階段づくり。掛軸で杭を打ち込む。



1



2

道の終点に位置する土浮庵の横に、幅1mの階段をつくる。丘の上に人を導く通路であり、土浮庵のテラスへ上がる踏み台であり、土壁を塗るとき作業台にもなる。



3



4

1, 2, 3\_支柱を地面に打ち込み、廃材の合板を張る。階段は当初は2段。のち3段になる。合板は傷みやすく、のち修理が必要になった。

4\_道の入口にはアーチをつくり、朝顔をはわせた。「朝顔門」と命名。



土浮庵・つちのいえに向かう道の入口。道は夏には草で覆われてしまう。



道の終点・土浮庵の横の階段は、最終的に3段になった。

### つちのいえの丘の地図 (2017~19年)



つちのいえに送電する電柱